

令和6年度(2024年度) 小学校特別活動プロジェクト研究

「なりたい自分に向けてがんばる力」を育てる小学校の特別活動

—学級活動における個々の意思決定とそれに基づく実践の充実を通して—

内容の要約

集団としての合意形成に重点を置く学級活動に焦点を当てた昨年度の研究を踏まえ、本研究では、個々の意思決定に重点を置く学級活動に焦点を当て、「なりたい自分に向けてがんばる力」を育てることを目指した。そこで、課題解決の過程に沿った一連の活動で、問題意識を高める工夫、「目標ボード」と「なりたい自分になりまシート」の活用、「やる気アップ交流会」の設定を行った。その結果、児童が学級での話し合いを生かして、自分に合った具体的な解決方法を決め、粘り強く取り組むなど、個々の意思決定とそれに基づく実践が充実し、「なりたい自分に向けてがんばる力」を育てることにつながった。

キーワード

「なりたい自分に向けてがんばる力」 学級活動
個々の意思決定とそれに基づく実践 課題解決の過程 学級での話し合い

目		次	
I	主題設定の理由	(1)	VI 研究の内容とその成果 (6)
II	研究の目標	(1)	1 研修と実践の往還 (6)
III	研究の仮説	(2)	2 年間指導計画の整理 (7)
IV	研究についての基本的な考え方	(2)	3 課題解決の過程に沿った一連の活動で講じた手立ての実際 (7)
1	本研究における「なりたい自分に向けてがんばる力」の捉え	(2)	4 講じた手立ての特徴的な事例とその効果 (9)
2	本研究で焦点を当てる学級活動の内容と学習過程	(2)	5 児童と指導者の変容 (13)
3	個々の意思決定とそれに基づく実践を充実させるための手立て	(3)	VII 研究のまとめと今後の課題 (16)
4	成果と課題の検証	(5)	1 研究のまとめ (16)
V	研究の進め方	(5)	2 今後の課題 (16)
1	研究の方法	(5)	文 献／付 録
2	研究の経過	(6)	



小学校特別活動プロジェクト研究

「なりたい自分に向けてがんばる力」を育てる小学校の特別活動

一学級活動における個々の意思決定とそれに基づく実践の充実を通して一

I 主 題 設 定 の 理 由

「第4期 教育振興基本計画(閣議決定)」(文部科学省 令和5年6月)では、教育政策全体の方向性の中で、「持続可能な社会の創り手の育成」および「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」の二つのコンセプトが示された。日本社会に根差したウェルビーイングの要素としては、「幸福感」「協働性」「自己肯定感」など11項目が挙げられ、そのうちの一つに「自己実現」がある。

「自己実現」に焦点を当てると、小学校学習指導要領(平成29年告示)において、特別活動の目標の3項目の一つに、「自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う」¹⁾と示されている。

国立教育政策研究所発行の「みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動 小学校編」(平成31年)(以下、特別活動小学校編という。)では、「自己実現」について、「将来なりたい自分に近づくため、今の自分にできることを考え実践しながら、よりよい自分づくりを目指すことができるようにすること」とし、特別活動において「なりたい自分に向けてがんばる力」を育てると示している。

また、小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別活動編(以下、学習指導要領解説という。)において、特別活動の内容の一つである学級活動の目標は、児童が合意形成し、役割を分担して協力して実践することの他に、学級での話し合いを生かして自己の課題の解決及び将来の生き方を描くために意思決定して実践することに、自主的、実践的に取り組むことを通して、特別活動の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指すとしている。

一方、令和5年度全国学力・学習状況調査における児童質問紙の「学級活動における学級での話し合いを生かして、今、自分が努力すべきことを決めて取り組んでいますか」という設問に対し、「当てはまる」と回答した滋賀県の児童の割合は、29.3%であった。自分が努力すべきことを意思決定して実践することについて、「当てはまる」と回答している児童の割合が3割を下回っているという現状がある。

当センターでは、令和5年度小学校特別活動プロジェクト研究(以下、令和5年度研究という。)において、「①問題の発見・確認」「②解決方法等の話し合い」「③解決方法の決定」「④決めたことの実践」「⑤振り返り」を基本とした課題解決の過程で、児童が集団としての合意形成を図る機会を設定し、「学ぶ意欲を引き出す学習集団」の形成につながった。しかし、特別活動のさらなる充実のために、個々が意思決定する機会の充実を図る必要性を指摘している。

以上のことから、学級活動において、学級での話し合いを生かして、個々の意思決定とそれに基づく実践を充実させることが、「なりたい自分に向けてがんばる力」を育てることにつながると考え、本主題を設定した。

II 研 究 の 目 標

学級活動において、学級での話し合いを生かして、個々の意思決定とそれに基づく実践を充実させることで、「なりたい自分に向けてがんばる力」を育てることを目指す。

Ⅲ 研究の仮説

指導者は1年間を見通して学級活動を計画し、個々の児童が意思決定する機会を継続的に設定する。学級活動は「①問題の発見・確認」「②解決方法等の話し合い」「③解決方法の決定」「④決めたことの実践」「⑤振り返り」を基本とした課題解決の過程に沿って実施する。その課題解決の過程で、児童が主体的に取り組むことができるよう問題意識を高める工夫を行う。また、児童が仲間と交流し考えを広げるための教材や、自分に合った具体的な解決方法を決定し実践するための学習プリントを活用する。さらに、児童が決めたことについて粘り強く実践できるよう、互いを励まし助言し合う機会を設定する。このような手立てを講じることで、学級での話し合いを生かして、個々の意思決定とそれに基づく実践が充実すれば「なりたい自分に向けてがんばる力」を育てることができるだろう。

Ⅳ 研究についての基本的な考え方

1 本研究における「なりたい自分に向けてがんばる力」の捉え

学習指導要領解説では、特別活動において育成を目指す資質・能力(表1)や、それらを育成するための学習過程を、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の三つの視点(表2)で整理している。そのうちのひとつである「自己実現」は、「集団の中で、現在及び将来の自己の生活の課題を発見し、よりよく改善しようとする視点」と示され、「自己実現」に必要な資質・能力は、「自己のよさや可能性を生かす力」「自己の在り方や生き方を考え設計する力」などとされている。

また、特別活動小学校編では「自己実現」について、「なりたい自分に向けてがんばる力」を育てると示している。

これらのことから、本研究では「なりたい自分に向けてがんばる力」を「自己のよさや可能性を生かす力」および「自己の在り方や生き方を考え設計する力」と捉える。

2 本研究で焦点を当てる学級活動の内容と学習過程

学習指導要領解説では、学級活動の内容として、「(1)学級や学校における生活づくりへの参画」「(2)日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全」「(3)一人一人のキャリア形成と自己実現」が示されている。令和5年度研究では、児童が集団としての合意形成を図ることに重点を置き学級活動(1)に焦点を当てた。本研究では個々の意思決定に重点を置くため、学級活動「(2)日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全」および学級活動「(3)一人一人のキャリア形成と自己実現」(以下、学級活動(2)および(3)という。)に焦点を当て、意図的、計画的に実施する。その際、学級活動の年間指導計画(以下、年間指導計画という。)を基に、題材(表3)と学校行事との関連、学年の系統性を意識しながら、児童が意思決定する機会を継続的に設定する。

表1 特別活動の目標と育成を目指す資質・能力(学習指導要領解説より整理)

【特別活動の目標】 集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を發揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、次のとおり資質・能力を育成することを目指す。		
【知識及び技能】 多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。	【思考力、判断力、表現力等】 集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。	【学びに向かう力、人間性等】 自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己実現を图ろうとする態度を養う。

表2 特別活動における三つの視点(学習指導要領解説より整理)

人間関係形成	社会参画	自己実現
集団の中で、人間関係を自主的、実践的によりよいものへと形成するという視点	よりよい学級・学校生活づくりなど、集団や社会に参画し様々な問題を主体的に解決しようとするという視点	集団の中で、現在及び将来の自己の生活の課題を発見し、よりよく改善しようとする視点

表3 学級活動(2)および(3)の題材例(特別活動小学校編より整理)

学級活動「(2)日常生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全」の題材例				
学年	ア 基本的な生活習慣の形成	イ よりよい人間関係の形成	ウ 心身ともに健康で安全な生活態度の形成	エ 食育の観点を踏まえた学校給食と望ましい食習慣の形成
低	・げん気のよいへんじ ・じぶんのもちもの	・よいところみつけ ・みんななかよし	・じぶんをまもるあいことば ・ひなんするときのやくそく	・たのしいきゅう食 ・えいようとげん気なからだ
中	・気もちのよいあいさつ ・なくそうずれ物	・きょう力するってどういうこと ・友達を大切にするために	・安全な登下校 ・地しんにそなえて	・おいしいきゅう食 ・バランスのよい食事
高	・気持ちのこもったあいさつ ・整理整頓マスター	・学校のリーダーとして ・男女仲よく	・健康な生活 ・地しんや火災	・パワーいっぱい朝ご飯 ・食事と健康
学級活動「(3)一人一人のキャリア形成と自己実現」の題材例				
学年	ア 現在や将来に希望や目標をもって生きる意欲や態度の形成	イ 社会参画意識の醸成や働くことの意義の理解	ウ 主体的な学習態度の形成と学校図書館等の活用	
低	・1ねんせいで できるようになったこと ・2年生の 1年かん	・きれいなきょうしつ ・ありがとう きゅうしょくとうばん	・おはなしめいじん きさめいじん ・たのしさはつ見 学校としょかん	
中	・4年生になって ・楽しいクラブ活動	・学級のおんなのために ・みんなのためにはたらくて大切だね	・習かんにしよう、家庭学習 ・上手な学校図書館の使い方	
高	・充実させよう、夏休み ・もうすぐ中学生	・委員会の仕事 ・見つめよう、自分の役わり	・進んで取り組む自主学習 ・学校図書館の活用	

また、学習指導要領解説では、「学級活動において育成することを目指す資質・能力は、問題の発見・確認、解決方法等の話し合い、解決方法の決定、決めたことの実践、振り返りといった基本的な学習過程の中で育まれるものである²⁾」と述べられており、学習過程の例が示されている。令和5年度研究では、この学習過程を課題解決の過程とし、課題解決の過程の充実を通して「学ぶ意欲を引き出す学習集団」の形成を目指し成果を得た。そのため本研究においても、「①問題の発見・確認」「②解決方法等の話し合い」「③解決方法の決定」「④決めたことの実践」「⑤振り返り」を基本とする課題解決の過程(図1)に沿って学級活動(2)および(3)を実施することとし、その過程で、学級での話し合いを生かして、個々の意思決定とそれに基づく実践を充実させる。

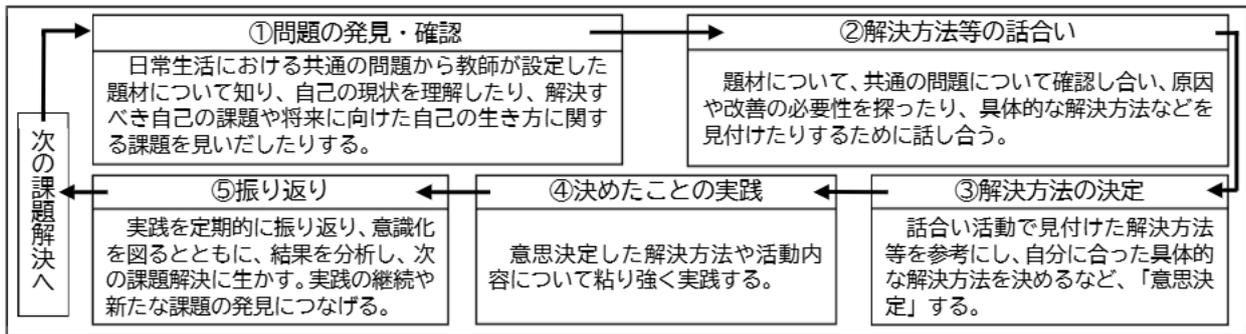


図1 学級活動(2)および(3)の課題解決の過程の例(学習指導要領解説から整理)

3 個々の意思決定とそれに基づく実践を充実させるための手立て

本研究において、個々の意思決定とそれに基づく実践が充実している児童の姿とは、児童が主体的に取り組んでいる、仲間と交流し考えを広げている、自分に合った具体的な解決方法を決定し実践している、決めたことについて粘り強く実践している、といった姿であると捉える。そして、個々の意思決定とそれに基づく実践を充実させるための手立てとして、課題解決の過程に沿った一連の活動で、問題意識を高める工夫、本研究で作成した教材「目標ボード」および学習プリント「なりたい自分になりまシート」の活用、「やる気アップ交流会」の設定を行う(図2)。

個々の意思決定とそれに基づく実践が充実している児童の姿	手立て
主体的に取り組んでいる	問題意識を高める工夫
仲間と交流し考えを広げている	教材「目標ボード」の活用
自分に合った具体的な解決方法を決定し実践している	学習プリント「なりたい自分になりまシート」の活用
決めたことについて粘り強く実践している	「やる気アップ交流会」の設定

図2 個々の意思決定とそれに基づく実践が充実している児童の姿と手立て

(1) 主体的に取り組むための問題意識を高める工夫

学習指導要領解説では、「授業において取り上げる課題について自分の現状や目指す姿について考えたり、学級の現状を調べたりして問題意識を高める」²⁾と示されている。「①問題の発見・確認」の過程では、児童が課題解決への意欲をもち主体的に取り組むことができるように、問題意識を高める工夫をする。

指導者は児童の現状と関連付けて題材を設定する。題材は朝の会や帰りの会などで事前に提示し、その題材に関わるアンケートを実施することで、児童が自分や学級の現状を客観的に把握できるようにする。また、題材の内容に応じて、養護教諭や栄養教諭と連携し、専門的な講話を通して、児童が題材に対する理解を深める機会を設ける。さらに、「なりたい自分の姿」について考えることができるように、身近な社会で共に生活している人へのインタビュー動画を活用する。このような工夫により、児童が問題意識を高めることで、日常生活における共通の問題を自分事として捉えることができ、個々の意思決定やそれに基づく実践に、主体的に取り組むことにつながると考える。

(2) 仲間と交流し考えを広げるための「目標ボード」の活用

「②解決方法等の話し合い」の過程では、児童が仲間と交流し考えを広げることができるよう、解決方法についてグループで交流する機会を設定する。その際、視覚的に他者の考えを把握することができるよう、「目標ボード」(図3)を活用する。なお、本研究では、「目標」と「解決方法」を同意義の言葉として捉え、児童に対しては、日常的に児童が使う「目標」という表現を用いることとする。

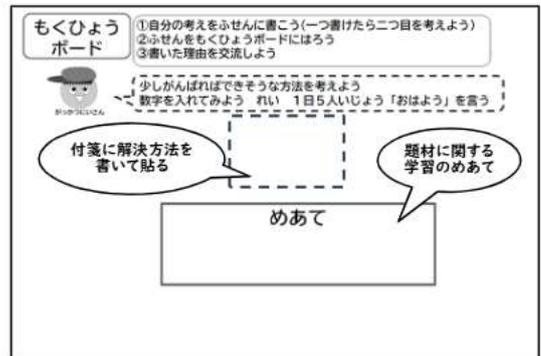


図3 「目標ボード」(吹き出しは筆者)

「目標ボード」の活用の仕方として、まず、題材に関する自分の解決方法を付箋に書く。次に、「目標ボード」に付箋を貼りながら、解決方法や、解決方法を考えた理由についてグループで交流する。その後の「③解決方法の決定」の過程では、共有した「目標ボード」にあるいくつかの解決方法の中から、自分に合った具体的な解決方法を決めることができるようにする。

(3) 自分に合った具体的な解決方法を決定し実践するための「なりたい自分になりまシート」の活用

「③解決方法の決定」や「⑤振り返り」の過程では、児童が自分に合った具体的な解決方法を決定し実践することができるよう、「なりたい自分になりまシート」(図4)を活用する。このシートには、「なりたい自分の姿」(図4のA)と、「なりたい自分に向けて何を、いつ、どのくらい取り組むかなどの解決方法を書く欄を設ける(図4のB)。児童が解決方法を考える際には、「少しがん

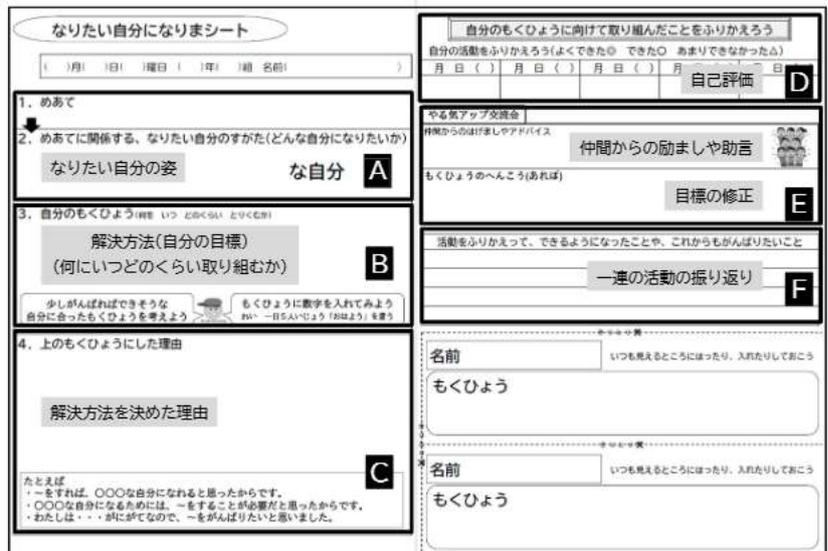


図4 「なりたい自分になりまシート」(枠線は筆者)

ばればできそうな自分に合った目標を考えよう」「目標に数字を入れてみよう」など、自分に合った具体的な解決方法を決めるための考え方を示し、個々の意思決定を補助する。また、解決方法を決めた理由を書く欄には、「なりたい自分の姿」や自分の課題を意識できるよう、文例を提示する(図4のC)。さらに、決めたことを実践できたかどうかについて自己評価を書く欄を設ける(図4のD)。自己評価は3段階で行うこととし、期間は1週間を目安とする。加えて、仲間からの助言を参考にしながら、必要に応じて自分の決めた解決方法を修正できる欄を設ける(図4のE)。1週間の実践が終わった際は、児童が一連の活動を振り返り、さらなる課題の解決に向けて学びを生かせるようにする(図4のF)。本研究では、これらの記入欄を基本とし、指導者が題材や児童の実態に応じて編集しながら「なりたい自分になりまシート」を活用することとする。

このように「なりたい自分になりまシート」を活用することで、児童が「なりたい自分の姿」を明確にしながらか自分に合った具体的な解決方法を決定し、自己評価や振り返りなどを生かして決めたことを実践することができるようにする。

(4) 決めたことについて粘り強く実践するための「やる気アップ交流会」の設定

学習指導要領解説では、「決めたことの実践、振り返りについては、意思決定しただけで終わることなく、決めたことについて粘り強く実践したり、一連の活動を振り返って成果や課題を確認し、自分の努力に自信を深めたり、更なる課題の解決に取り組もうとする意欲を高めたりすることが重要である」²⁾と示されている。「④決めたことの実践」や「⑤振り返り」の過程では、児童が決めたことの実践を始めて二、三日後を目安に、朝の会や帰りの会等で「やる気アップ交流会」を設定する。「やる気アップ交流会」では、「なりたい自分になりまシート」に記入した自己評価や「仲間からはげましやアドバイス」の欄を用いて、互いを励ます言葉や助言を伝え合う。このような交流により、児童が自分の努力に自信を深めたり、新たなアイデアを得たりしながら、決めたことについて粘り強く実践できるようにする。

4 成果と課題の検証

本研究において「なりたい自分に向けてがんばる力」として捉えている、「自己のよさや可能性を生かす力」および「自己の在り方や生き方を考え設計する力」を、学級活動の授業中の発言や「なりたい自分になりまシート」の記述から見取る。また、「①問題の発見・確認」「②解決方法等の話し合い」「③解決方法の決定」「④決めたことの実践」「⑤振り返り」などの観点で児童質問紙調査を作成し、実施する。調査結果については得点化し、研究始期と終期で比較して成果と課題を検証する。

V 研究の進め方

1 研究の方法

- (1) 本研究の目標を研究委員(本研究に係る研修を受けながら実践を行う指導者)と共有する。
- (2) 実践校の研究委員および他教員を対象とした質問紙調査を行い、学級活動の取組状況を把握する。
- (3) 実践校の児童を対象とした質問紙調査を研究の始期と終期に行う。
- (4) プロジェクト研究会を実施し、「なりたい自分に向けてがんばる力」を育てるために、実践校の実態に応じた手立てを検討する。
- (5) 研究委員は、プロジェクト研究会での研修と実践校における実践の往還を進める。
- (6) 児童質問紙調査や「なりたい自分になりまシート」の記述などから、児童の変容を分析し、研究の成果と課題を検証する。

2 研究の経過

4月	研究構想、研究推進計画の立案	9月～10月	各実践校における実証授業
5月	第1回プロジェクト研究会 (研究の概要説明と手立ての共有)	10月～11月	第4回プロジェクト研究会 (各実践校における実証授業と研究協議)
6月	児童および指導者質問紙調査(始期)	11月	児童および指導者質問紙調査(終期)
6月～7月	第2回プロジェクト研究会 (手立ての有効性についての研究協議)	11月～12月	第5回プロジェクト研究会 (研究の成果と課題についての研究協議)
8月	各実践校における実証授業	1月	研究論文原稿執筆
	第3回プロジェクト研究会 (実践交流と2学期の授業構想)	2月	研究発表準備
		3月	研究発表大会
			研究のまとめ

VI 研究の内容とその成果

1 研修と実践の往還

学級活動において、個々の意思決定とそれに基づく実践を充実させ、「なりたい自分に向けてがんばる力」を育てるため、研究委員はプロジェクト研究会(以下、研究会という。)での研修と、実践校における実践の往還を進めた(図5)。実践については、研究委員は研究会での学びを踏まえ、表4に示す題材で行った。



図5 本研究における研修と実践の往還

表4 研究委員が実践した学級活動(2)および(3)の主な題材(題材は表3を参考に設定)

指導者 (研究委員)	実践校	対象学年	6～7月に実践した題材	9月～11月に実践した題材
A	W校	第5学年	(2)イ「友達を大切にするために」	(3)ア「学校のリーダーとして」 (3)ウ「進んで取り組む自主学習」
B	X校	第6学年	(2)ウ「ストレスとの上手な付き合い方」 (2)イ「デジタル端末の使い方」	(3)ア「学校のリーダーとして」 (3)イ「運動会を通して目指す になりたい自分」
C	Y校	第5学年	(2)イ「学級目標の実現に向けて」	(3)イ「運動会を通して目指す になりたい自分」 (3)イ「見つめよう、自分の役わり」
D	Z校	第6学年	(3)ア「未来へつなげ！新Z校プライド貯金」	(3)イ「運動会を通して目指す になりたい自分」 (3)ウ「進んで取り組む自主学習」

2 年間指導計画の整理

指導者は第2回研究会で、自校の年間指導計画を基に、計画されている題材が学校行事や児童の現状と関連付けて設定されているか、また自校の年間指導計画が系統性のあるものとなっているかを確認した。そして、年間指導計画を基に、意図的、計画的に学級活動を実施した。W校の指導者Aが整理した実際の年間指導計画の一部を表5に示す。指導者Aは、本研究での学びを通し、自校の年間指導計画を改めて整理することに加え、同じ市町の学校にも年間指導計画のモデルを示し、必要に応じて活用してもらいたいと考えようになった。

表5 指導者Aが整理した年間指導計画の一部(5、6学年の部分)

	学校行事	第5学年		第6学年	
		(1)学級や学校における生活づくりへの参画 (12時間)	(2)日常生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全 (3)一人一人のキャリア形成と自己実現 (全23時間)	(1)学級や学校における生活づくりへの参画 (12時間)	(2)日常生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全 (3)一人一人のキャリア形成と自己実現 (全23時間)
		予想される議題	題材例	予想される議題	題材例
4月	始業式	(1)係を決めよう	(3)ア 5年生になって	(1)係を決めよう	(3)ア 6年生になって
5月	修学旅行	(1)学級目標を決めよう	(2)イ 男女仲よく	(1)学級目標を決めよう	(2)イ 学校のリーダーとして
6月	フローティングスクール	(1)フローティングスクールの学校紹介を考えよう	(3)イ 委員会の仕事	(1)レベルアップ目標を考えよう	(3)イ 見つめよう、自分の役わり
7月	終業式	(1)1学期ががんばったね会をしよう	(2)ウ スマホの使い方を考えよう	(1)1学期ががんばったね会をしよう	(2)ウ SNSの使い方を考えよう
8月	始業式	(1)係を決めよう	(2)ア 整理整頓マスター	(1)係を決めよう	(2)ア 気もちのこもったあいさつ
9月	避難訓練	(1)レベルアップ目標を考えよう	(3)イ 運動会で目指す になりたい自分	(1)運動会の学級スローガンを決めよう	(3)イ 運動会で目指す になりたい自分
10月	運動会	(1)学級目標をふりかえろう	(3)ウ 学校図書館の活用	(1)学級目標をふりかえろう	(3)ウ 進んで取り組む自主学習
11月	音楽会	(1)秋祭りを計画しよう	(2)エ 体と塩分の関係を知ろう	(1)学級の文集を作ろう	(2)エ 食事と健康

3 課題解決の過程に沿った一連の活動で講じた手立ての実際

本研究では、課題解決の過程に沿った一連の活動で、問題意識を高める工夫、「目標ボード」および「になりたい自分になりまシート」の活用、「やる気アップ交流会」の設定を行った。この項では、第6学年学級活動(2)ウ「ストレスとの上手な付き合い方」の実践を基に、課題解決の過程に沿った一連の活動で講じた手立ての実際と、それによる児童の姿を示す。

X校の指導者Bは第1回研究会で、学級での話合いを生かして、個々の意思決定とそれに基づく実践を充実させるための手立てを学び、学級活動の授業づくりを行った。指導者Bは、児童が学級に慣れ始めた頃に些細なトラブルが増加したり、進学を控えて学習や人間関係への不安が高まったりすることを想定した。そこで、児童がストレスに対する正しい知識をもち、ストレスと上手に付き合えるよう、6月に学級活動(2)ウ「ストレスとの上手な付き合い方」の題材を設定した。

「①問題の発見・確認」の過程で、指導者Bは題材に対する児童の問題意識を高めるため、事前に行ったアンケートの結果を提示した。「あなたには悩みや心配なことがありますか」という質問の回答結果から、児童は勉強のこと、自分の性格のこと、友達のことなどについて、自分に限らず学級の

仲間も悩みや心配を抱えていることを知った。その後、指導者Bは「悩みや心配なことがストレスにつながる時がある」という児童の発言から、「ストレスと上手に付き合いたい」という児童の思いを学級全体で共有し、自分事として考えられるようにした。また、指導者Bは児童の問題意識をさらに高めるためにはストレスに対する正しい知識が必要であると考え、養護教諭と連携して授業を行った(図6)。



図6 養護教諭との連携の様子

立て指で押して見せながら、圧力がかかりすぎると風船が割れてしまうように、ストレスがかかりすぎると心が疲れてしまうことや、人によってストレスの感じ方が違うことを伝えた。

「②解決方法等の話し合い」の過程で、児童はストレスと上手に付き合うための解決方法を付箋に書き、その付箋を「目標ボード」に貼りながらグループで交流した。児童aは研究初期に行った児童質問紙調査の結果において、学級での話し合いを生かして解決方法を決めることへの意識が低いことが分かった。しかし本時では、「なりたい自分の姿」を「どんなことがあってもポジティブに考えられる自分」とし、「目標ボード」を活用しながら、「音楽を聴く」「ペットと遊ぶ」などの解決方法を友達に伝えたり、友達の解決方法を聞いたりした(図7)。

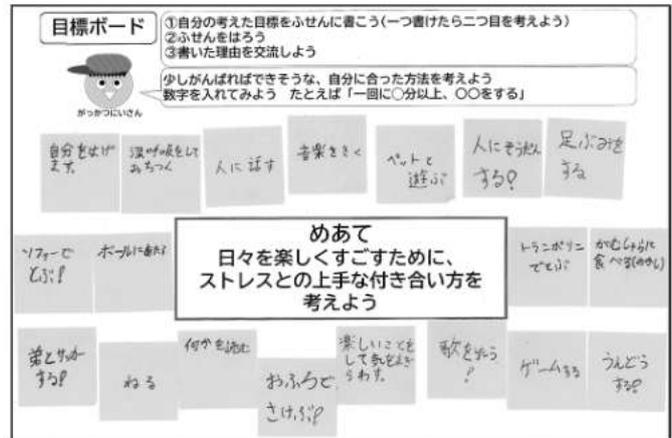


図7 児童aのグループが活用した「目標ボード」

その後の「③解決方法の決定」の過程で、児童aは自分の考えた解決方法と「目標ボード」にある様々な解決方法の中から、どれがより自分に合った具体的な解決方法かを考え、最終的には「嫌なことがあったら友達3人に話す」という解決方法に決め、「なりたい自分になりまシート」に記述した。

「④決めたことの実践」および「⑤振り返り」の過程で、指導者Bは、授業から1週間を、決めたことを実践できたかどうかについて自己評価をする期間とし、授業から三日後に「やる気アップ交流会」を設定した(図8)。その際、「嫌なことがあったら友達3人に話す」という解決方法を実践していた児童aは、グループの友達から、家族や大人なども含めもっとたくさんの人に話せばよいという助言を受けた。その後、友達の助言に納得し、「嫌なことがあったときに気が済むまでだれかと話す」という目標に修正して実践を続けた。



図8 「やる気アップ交流会」の様子

児童aが「なりたい自分になりまシート」に記述した実践後の振り返り(図9)からは、「やる気アップ交流会」の意義を実感していることや、「人によってストレスの感じ方が違う」という養護教諭の話が今後の実践への意欲につながっていることがうかがえた。

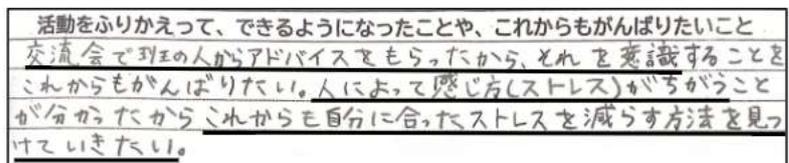


図9 児童aの振り返り(下線は筆者)

このように、課題解決の過程に沿った一連の活動で、学級やグループでの話し合いを生かして、個々の意思決定とそれに基づく実践を充実させるために手立てを講じた。その他の児童が「なりたい自分になりまシート」に記述した振り返り(図10)からも、自分の成功体験を今後の取組に生かそうとして

いることがうかがえ、「自己のよさや可能性を生かす力」が見取れた。また、自分自身の考え方や理想などを踏まえ、学級での話し合いを生かして解決方法を修正しながら粘り強く実践したことがうかがえ、「自己の在り方や生き方を考え設計する力」が見取れた。このことから、本研究の手立てを講じることで、「なりたい自分に向けてがんばる力」を育てることにつながったといえる。

【主に「自己のよさや可能性を生かす力」を見取ることができた記述】

- ・朝にちょっと動くだけで気持ちよく学校に行けたので、これからもやっていきたいと思った。授業を通してストレスとの上手な付き合い方が分かった。
- ・「目標ボード」にある友達の考えた目標を見て、「これは自分の目標にも取り入れることができそう」と考え、目標をレベルアップすることができた。
- ・「やる気アップ交流会」での友達との話し合いでアドバイスをもらって目標を付け足し、その目標に向かってがんばれたから、これからもがんばりたい。

【主に「自己の在り方や生き方を考え設計する力」を見取ることができた記述】

- ・私は嫌なことを溜め込んでしまうから、〇〇先生(養護教諭)が言っていたように心の形が変わってしまう前に、班の人のアドバイスを生かし自分も好きなことをして心を楽に過ごしたい。
- ・私は親切な人になりたい。ストレスが溜まるとイライラして人に嫌なことをしてしまうかもしれないから、ストレスが溜まらないように8～9時間しっかり寝ることをこれからも続けたい。
- ・自分は我慢しすぎでストレスが溜まりがちだったけど、この学習を通してストレスとうまく付き合いそうになったので、みんなで出し合った方法をたくさん試してみたいと思った。

図10 「なりたい自分になりまシート」に記述された児童の振り返り(下線は筆者)

4 講じた手立ての特徴的な事例とその効果

この項では、一つ一つの手立てに焦点を当て、特徴的な事例を基にその効果を示す。

(1) 児童が主体的に取り組むために、問題意識を高める工夫を行った事例

W校の指導者Aは第1回研究会で、児童が主体的に取り組むためには児童の問題意識を高める必要があることを学んだ。また第3回研究会での講義を受け、児童が、活動の目的を意識して解決方法を定めることの重要性を学んだ。そこで、第5学年学級活動(3)ウ「進んで取り組む自主学習」の題材を設定し、児童が自主学習の目的を意識しながら問題意識を高められるよう手立てを講じた。

「①問題の発見・確認」の過程で、指導者Aは事前に行ったアンケートの結果を提示した(図11)。まず、児童は、指導者Aが内容を決めている家庭学習と、自主学習の取組状況を円グラフで比較し、家庭学習に比べ自主学習に取り組んでいる人が少ないという現状に気付いた。

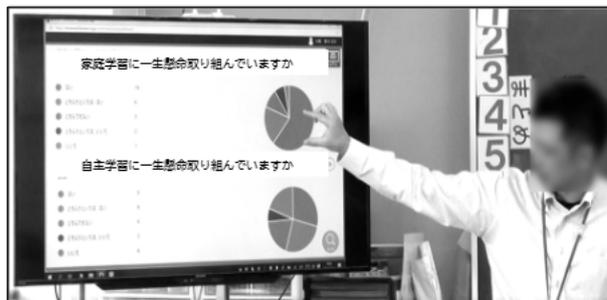


図11 アンケート結果を提示する様子

次に、「何のために自主学習を行っていますか」という質問の回答結果から、授業内容を理解することや自分の得意分野をのばすことを目的に自主学習に取り組んでいる人が多いことを知った。

また、指導者Aは、児童が自主学習の必要性を感じ、問題意識を高めるためには、新たな視点から自主学習の目的に気付けるようにすることが必要であると考えた。そこで、1学年上である6年生を対象に行った、自主学習に関するインタビュー動画を作成し提示した。児童は動画を視聴し、6年生が「新しいことを知る」「次の授業に向けて準備する」などの目的で自主学習を行っていることに気付いた。その気付きから、指導者Aは児童に、自主学習の取組方法を振り返るよう促し、

今後、何を目的に、どのように取り組んでいくとよいか問題提起した。

その後、児童は自主学習に関する自分の課題の解決方法を決め実践を行った。実践後の児童の振り返り(図12)からは、主体的に自主学習に取り組んだ様子がうかがえた。また、指導者Aは、6年生から良い影響を受けた児童がいたことや、以前より主体的に自主学習に取り組む児童が増えたことを実感していた。

このように、アンケート結果やインタビュー動画の提示など、問題意識を高める工夫をすることが、児童が主体的に取り組むための一助になったと考えられる。

- ・自主学習はあまりやっていたが、目標を決めることで自主学習をすることが習慣になってきた。
- ・五日間のうち三日間は自主学習ができるようになった。これからも続けたい。
- ・1学期はあまり自主学習をしてこなかったけれど、2学期の後半には(自主学習ノートが)3冊目に入った。
- ・自分の苦手な漢字に取り組んだ。少し書けるようになったと思う。
- ・あまりできなかった日の分は明日に取り組むなど、工夫したい。

図12 主体的に取り組んだ様子がうかがえた児童の振り返り(下線は筆者)

(2) 児童が仲間と交流し考えを広げるために、「目標ボード」を活用した事例

Y校の指導者Cは第1回研究会で、児童が仲間と交流し考えを広げることで、自分に合った具体的な解決方法を定めることにつながることを学んだ。そこで、第5学年学級活動(2)イ「学級目標の実現に向けて」の題材を設定し、「目標ボード」を授業で活用した。この題材では、学級目標である「三十三位一体(33人が一致団結しながら互いに成長しよう)」が実現に向かっているかどうかを児童が振り返り、学級目標の実現に向けて自分の解決方法を定めることとした。

「②解決方法等の話し合い」の過程で、児童は自分の考えた解決方法を付箋に書き、「目標ボード」に貼りながら交流した(図13)。児童bは「時間をきちんと見て行動する」という解決方法をグループの友達に伝えた。すると、それを聞いた児童cは、時間をみて行動することは児童bだけでなく学級の全員が実践しなければならないことであると考え、全員に啓発した方がよいことを助言した。その結果、児童bは「時間をきちんと見て行動する」に加え、啓発の意味を含め、時間を守るようみんなに呼びかけることを自分の解決方法に決めた。この交流の様子から、児童bは友達の助言を生かし、自分にはなかった考えを取り入れ、解決方法を決めたことがうかがえた。

このように、「目標ボード」を活用し、仲間と交流することで、考えを広げながら解決方法を定めることができた。



児童b:私は時間をきちんと見て行動するという目標を考えました。

児童c:三十三位一体を目指しているのだから、33人が同じことをやらないといけないと思うよ。帰りの会の時とかに…

児童b:声かけるとか?

児童c:そんな感じがいいと思うよ。

児童b:指示するとか?知らせるとか?

児童c:そうだね。

図13 「目標ボード」を活用した交流における児童bと児童cの話し合いの主な内容

(3) 児童が自分に合った具体的な解決方法を決定し実践するため、「なりたい自分になりまシート」を活用した事例

Z校の指導者Dは第3回研究会で、年間を通してなりたい自分を目指して取り組むことの大切さを学んだ。そこで、改めて夏季休業明けに、児童が「なりたい自分の姿」を考える機会を設定した。

そして、9月には第6学年学級活動(3)イ「運動会を通して目指す になりたい自分」の題材を設定し、児童が「になりたい自分の姿」に近づくための解決方法を決める授業を行った。

授業の中で、児童は夏季休業明けに考えた「になりたい自分の姿」を「になりたい自分になりまシート」に記入した。そこには「憧れの存在」「ベストをつくす自分」「みんなのために頑張れる自分」など、最高学年であることを意識した内容が多く見られた。その後、になりたい自分に近づくための解決方法を決定する際、指導者Dは「になりたい自分になりまシート」に示されている、自分に合った具体的な解決方法を決めるための考え方(「少しがんばればできそうな自分に合った目標を考えよう」「目標に数字を入れてみよう」)を示し、それを意識しながら決定するよう促した。

「になりたい自分になりまシート」の活用例として、児童dの記述した内容を図14に示す。児童dは、下学年から憧れられる自分や運動会を頑張ったと思える自分になりたいと考えた(図14のA)。そこで、今年度は応援団員になったことを踏まえ、解決方法(自分の目標)を、「応援の時に運動場全部に聞こえるような声を出す」とした(図14のB・C)。その後実践を行う中で、児童dの実践に対する自己評価は少しずつよくなっていった(図14のD)。これは、授業から三日後の「やる気アップ交流会」で友達から励ましの言葉をもらったことも影響していると考えられる(図14のE)。実践から1週間後の振り返りには、応援団員で行う応援練習で目標通り大きな声で練習できた達成感や、縦割り班での応援練習では声の大きさが不十分であったことを踏まえ、さらに頑張りたいという前向きな気持ちが表現されていた(図14のF)。

このように、児童dは「になりたい自分になりまシート」を活用し、「になりたい自分の姿」を明確にしながらか自分に合った具体的な解決方法を決定し、自己評価や振り返りなどを生かして決めたことを実践することができた。

なりたい自分になりまシート

(9月 / 19日(木曜日)) 年() 組 名前()

1. 学習のめあて
最新学年にして取り組むことと考え自分の目標を立てよう。

2. めあてに関係する、なりたい自分のすがた(どんな自分になりたいか)
 下学年からめこめこされてかえったと思える 自分 **A**

3. 自分のもくひょう(何を いつ どのくらい とりくむか)
 応援のときに運動場全部に聞こえるような声を出す。 **B**

少しがんばればできそうな自分に合ったもくひょうを考えよう もくひょうに数字を入れてみよう
 おい、一日5人いじよう「おはよう」を言う

4. 上のもくひょうにした理由
 自分は今年団員もなったしみんなを引っぱていけるようにしないと いけないから。 **C**

たとえば
 ・～をすれば、○○○な自分になれると思ったからです。
 ・○○○な自分になるためには、～をすることが必要だと思ったからです。
 ・わたしは・・・がにがてなので、～をがんばりたいと思いました。

自分のもくひょうに向けて取り組んだことをふりかえろう

自分の活動をふりかえろう(よくできた◎ できた○ あまりできなかった△)

9月24日(木)	9月25日(金)	9月26日(土)	9月27日(日)	9月28日(月)
△	○	◎	◎	◎

D

やる気アップ交流会

仲間からの励ましやアドバイスの心をつぶさないようにがんばって。大きな声を出せることはすごいです。 **E**

もくひょうのへんこう(あれば)

F

活動をふりかえって、できるようになったことや、これからがんばりたいこと
 ほぼ毎日、団長や団員だけで応援練習をやってたけど声を出せ
 たし外でやってないけど部員全体に聞こえる声で言えました。
 月曜日はたてわり班で教える練習でダンスは教えてあげられた
 HJ声があつてなかつたので、みんなも出してくれるようにがんばりたいです。

名前 いつも見えるところにはったり、入れたりしておこう

もくひょう

名前 いつも見えるところにはったり、入れたりしておこう

もくひょう

図14 児童dの「なりたい自分になりまシート」(枠線は筆者)

(4) 児童が粘り強く実践するため、「やる気アップ交流会」を設定した事例

Y校の指導者Cは第1回研究会で、児童が決めたことについて粘り強く実践するためには、話し合いを生かした実践の振り返りが重要であることを学んだ。そこで、「やる気アップ交流会」を設定し、児童が学級活動で決めたことを実践する中で、自分の努力に自信を深めたり、なりたいたい自分に向けて新たなアイデアを得たりしながら、決めたことについて粘り強く実践できるようにした。

指導者Cは児童の清掃活動への取り組み方を改善したいと考え、第5学年学級活動(3)イ「見つめよう、自分の役わり」の題材を設定した。学級活動の授業で、児童は日常における自分たちの清掃活動に関するアンケートの結果やテーマパークの清掃員の話から問題意識を高め、「目標ボード」を基に仲間と交流しながら解決方法を決め、「なりたいたい自分になりまシート」に記述した。指導者Cは授業から三日後に「やる気アップ交流会」を設定した。その際、話し合いを活発化させるため、清掃活動と一緒にいるグループで「やる気アップ交流会」を行うこととした。また、「やる気アップ交流会」の初めに、自分や友達が粘り強く実践できるよう互いに助言し合ったり励まし合ったりすることや、必要に応じて解決方法を修正することを児童に促した。

児童eは学級活動の授業において、「なりたいたい自分の姿」を「掃除の名人」とし、廊下の中央より端の方にごみが落ちているという現状から、「廊下の真ん中と同じくらい、端もきれいにする」という解決方法(自分の目標)に決めた。その後、二日間実践を行い、自己評価は○と◎だった。三日後、同じ清掃場所を担当する友達と「やる気アップ交流会」を行い、自分の実践を振り返った。「やる気アップ交流会」で、児童eと同じグループである児童fは、児童eの努力を認めつつ、掃除の名人になるためにさらに解決方法のレベルを上げることを助言した(図15)。話し合いの結果、児童eは、児童fの助言を生かして、廊下の端もきれいにしつつ、物(端にある机など)を移動させて隅々まで掃除をすることとした。五日間の実践を終え、児童eの振り返り(図16)から「やる気アップ交流会」の意義を実感していることがうかがえた。また、児童eと同様に他の児童も「『やる気アップ交流会』の後はきれいにトイレ掃除をすることができた」「『やる気アップ交流会』で目標を修正することで、一人で考えた目標よりも、なりたいたい自分に近づける目標になったと思う」などと振り返っており、「やる気アップ交流会」の設定が有効に働いたことがうかがえた。



児童e:私は「廊下の真ん中と同じくらい端もきれいにする」という目標で(二日間の自己評価は)○と◎でした。

児童f:確かにね、ごみがいっぱい取れていたからね。でも、もうちょっとレベルを上げれば掃除の名人になれると思うよ。(中略)。例えば、物をどけるとか…。端もきれいにしつつ…

児童e:端もきれいにしつつ、物を移動させるとか？

児童f:そうそう。

図15 「やる気アップ交流会」での児童eと児童fの話し合いの主な内容

活動をふりかえって、できるようになったことや、これからがんばりたいこと
わたしは目標を意識してがんばること(はい、このころ下がともきれいに
なれたと思います。やる気アップ交流会を通して1回目の目標もいれつつ、
さらにレベルアップした目標をたてられました。(ほうまや下びまじ)な
く、よびまのとまも消毒をどかして目標にいきりとりくめました。

図16 児童eの振り返り(下線は筆者)

このように、「やる気アップ交流会」を設定し、学級での話し合いを生かして自分の実践を振り返ることで、自分の努力に自信を深めたり、新たなアイデアを得たりしながら、決めたことについて粘り強く実践することができた。

5 児童と指導者の変容

(1) 児童質問紙調査結果から分かる児童の変容

本研究では、「なりたい自分に向けてがんばる力」が育ったかどうかを検証するために児童質問紙調査を実施し、質問項目が「なりたい自分に向けてがんばる力」を検証するための尺度として信頼できるかどうかを確かめるために因子分析¹⁾を行った(詳細は付録①)。その結果、表6に示す8項目が、一つの尺度として信頼できることが確認できた。そのため、この8項目で「なりたい自分に向けてがんばる力」が育ったかどうかを検証することは、一定の妥当性があると考えた。

実践校の児童122人(第5学年2クラス、第6学年2クラス)を対象に、研究始期と終期に質問紙調査を行った。「当てはまる」を4点、「どちらかと言えば当てはまる」を3点、「どちらかと言えば当てはまらない」を2点、「当てはまらない」を1点として調査結果を得点化し、8項目の平均得点を研究始期と終期で比較した。

表6 研究始期と終期の平均得点

質問項目	始期	終期
1 学級活動で自分の目標を立てるとき、自分だけで考えるのではなく、学級の仲間と話し合いながら立てていますか。	2.36	3.38
2 学級活動で自分の目標を立てるとき、自分に合った具体的な目標を立てていますか。	2.96	3.39
3 自分の目標を立てた後、目標達成に向けて決めたことを実際に取り組んでいますか。	3.17	3.52
4 目標達成に向けて取り組む中で、自分の目標が自分に合った具体的な目標になっているかどうかを考え直していますか。	2.60	3.18
5 自分の目標達成に向けて取り組んだことを振り返り、できるようになったことや、もっとがんばりたいことを考えていますか。	2.75	3.39
6 自分の目標達成に向けて取り組む中で、仲間とはげましやアドバイスの言葉を送り合っていますか。	2.50	3.43
7 学級の仲間は、自分の目標に向けてがんばっていると感じますか。	3.06	3.69
8 学級の仲間が自分の目標に向けてがんばっている姿を見て、自分もがんばろうと思いますか。	3.49	3.65
8項目の平均得点	2.86	3.45

研究始期における8項目の平均得点は2.86点だったが、終期では3.45点に増加した。この差が有意であるかを調べたところ、研究終期の結果が有意に高いことがわかった(詳細は付録②)。特に増加が顕著に見られた質問項目に着目すると、質問項目1「学級活動で自分の目標を立てるとき、自分だけで考えるのではなく、学級の仲間と話し合いながら立てていますか」の平均得点は2.36点から3.38点に増加した。これは、「②解決方法等の話し合い」の過程で「目標ボード」を授業に取り入れ、交流を活発化させたことに起因していると考えられる。また、質問項目6「自分の目標達成に向けて取り組む中で、仲間とはげましやアドバイスの言葉を送り合っていますか」の平均得点は2.50点から3.43点に増加した。これは「⑤振り返り」の過程で「やる気アップ交流会」を設定し、仲間とともに実践を振り返る活動を積み重ねたことに起因していると考えられる。

質問項目7「学級の仲間は、自分の目標に向けてがんばっていると感じますか」および質問項目8「学級の仲間が自分の目標に向けてがんばっているのを見て、自分もがんばろうと思いますか」に着目すると、他の質問項目と比べ始期、終期ともに平均得点が高い。さらに、終期の平均得点は始期より増加している。このことから、児童は互いに高め合える集団の中で、自分自身もさらに成

¹⁾ 因子分析とは、複数のデータのうち、相関が高いもの同士をまとめて、そこに共通因子を見いだすことで、データの構造を明らかにする分析手法のこと。分析には、清水裕士氏が開発した統計分析ソフトHADを利用した。

長していこうとする意識があり、終期ではそれがさらに高まったといえる。これは、学級での話し合いを生かすことを重視し、「目標ボード」を活用したり、「やる気アップ交流会」を設定したりしたことで、児童が学級の仲間の解決方法や、学級の仲間が努力している様子に着目できたことに起因していると考えられる。

また、児童は研究終期に学級活動(2)および(3)について振り返った(図17)。児童の振り返りから、「目標ボード」「なりたい自分になりまシート」「やる気アップ交流会」などの手立てにより、個々の意思決定とそれに基づく実践が充実したことや、児童が自分の成長を実感したことがうかがえた。

これらのことから、課題解決の過程に沿った一連の活動で、個々の意思決定とそれに基づく実践を充実させる手立てを講じたことで、「なりたい自分に向けてがんばる力」を育てることにつながったといえる。

- ・友達との交流のおかげで、もっと目標のレベルが上がるような工夫が知ることができたり、自分のがんばろうと思っていることを知ってもらえたりすることができて、決めたことを最後までがんばれた。5年生のときよりがんばろうとする意識が高まったと思う。
- ・「目標ボード」を使い、みんなで意見を出し合うことで、「困っている人がいたら助ける」という目標を決めることができた。5年生のときより、困っている人を助けることを意識するようになった。
- ・「なりたい自分になりまシート」を使うことで、「5年生では～ができていなかったから～しよう」とか「こんな自分になりたいから～しよう。理由は…。」のように深く考えることができた。
- ・「なりたい自分になりまシート」で毎日振り返りをする中で、自分の成長やもっとがんばれそうなことを見つけることができた。◎を目指そうと、より目標を意識して取り組めるようになった。これからも振り返りを大事にしていきたい。
- ・「やる気アップ交流会」で、友達と目標やどのくらい達成できているかを交流することで、相手の目標も知ることができて、互いの目標や取り組んでいる様子を意識し合うことができた。「私もがんばろう」という気持ちになれた。
- ・5年生のときは、できないと思っていたことはしていなかった。「やる気アップ交流会」を経て、自分には難しいことでも努力していたらできるようになっていった。これからもできることを増やしていきたい。
- ・みんなで目標について話し合うことで、よりよい学級にできるし、自分が思うことを言える学級にもつながっていくと思うから、これからも友達と話し合うことを続けていきたい。

図17 研究終期の児童の振り返り(下線は筆者)

(2) 指導者から見た児童の変容

第5回研究会で、指導者は本研究を振り返り、児童の変容から成果を見いだした(図18)。本研究を通し、指導者は、具体的な目標を決める児童や、自ら決めた目標を実践する児童が増えたことを実感していた。そのため、質問紙調査の結果だけでなく指導者の所感からも、個々の意思決定とそれに基づく実践が充実し、「なりたい自分に向けてがんばる力」を育てることにつながったと考えられる。

また、指導者は、共感的な学級の雰囲気生まれたことや、自分の役割を自覚する児童が見られたことなどを、成果として見いだした。このことから、特別活動において育成を目指す資質・能力やそれらを育成するための学習過程を整理する視点とされている「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」のうち、本研究で焦点を当てている「自己実現」に関わる成長だけでなく、「人間関係形成」や「社会参画」に関わる成長も実感していたことがうかがえた。

さらに、指導者が実践を振り返る中で、題材や児童の実態に応じて「なりたい自分になりまシート」の内容を編集する重要性が挙げられた。特に学級活動(2)に関わる題材は、「なりたい自分になりまシート」に「自分の課題」の欄を追加し、児童に解決すべき課題を意識付ける方が、より主体性を引き出せる可能性があることが分かった。

- ・ 具体的な目標を決める児童が増えた。
- ・ 自ら決めた目標を実践する児童が増えた。
- ・ 目標をもって取り組むことのよさを実感している児童が少しずつ増えてきた。
- ・ 「『他の学年の人とも話す』と目標を立ててがんばったから、前は全く話せなかった登校班の人と話せるようになった」と振り返っている児童がいた。児童同士の言葉掛けや手を取り合おうとする姿が増えた。
- ・ 個人目標を立て、振り返り、友達との交流やアドバイスをし合うことで人間関係が形成され、前向きにやる気をもって学校生活を送ろうとする児童が増えた。
- ・ 清掃活動や運動会に向けた取組など、自分の役割を自覚し、自分にできることをしようとする児童が見られた。

図18 指導者が見いだした成果の一部(下線は筆者)

(3) 指導者の意識の変容

指導者は第5回研究会で自分自身の意識の変容について振り返った(図19)。研究始期に指導者は、学級活動(2)および(3)で扱う題材の内容が分からない、授業の流れがイメージできない、児童の目標を決める経験が少ない、などの悩みを抱えていた。一方、研究終期では、授業実践を積み重ねることで、児童が解決方法を決め実践することの重要性や本研究に係る手立ての有効性などを実感し、自分自身が以前にはなかった視点で授業づくりを行っていることに気付いた。このような指導者の意識の変容が、授業づくりに生かされ、児童の「なりたい自分に向けてがんばる力」を育てることにつながったと考える。

- ・ 学級活動(2)および(3)の内容が十分に理解できていなく、授業の流れもイメージし切れていなかったが、研究を通し、授業の流れや、必要な手立てが分かるようになった。
- ・ 学級活動の内容が(1)、(2)、(3)に分かれており、学級や児童の課題に対し、どの内容で課題を解決するのが適切かについて考えるようになった。
- ・ 学級活動を行ううえで、学年の系統性が反映された年間指導計画の必要性を感じるようになった。
- ・ より効果的に学習が展開できるように、事前・事後の活動内容、題材の実施時期、題材と行事との関連などを、今までよりも深く考えるようになった。
- ・ 自分の目標は自分だけで考えるものだと思っていたが、「学級の仲間と一緒に考えることでよりよい目標にできる」という考えに変わった。
- ・ 目標を立てて実践し、仲間と話し合いながら振り返る活動は、他教科や他の場面でも生かしていくべきだと考えるようになった。
- ・ 児童のキャリアを形成するには、一つ一つの取組がそこで終わってしまうのではなく、大きなゴール(なりたい自分)を見据えて進めていくべきだということを強く認識するようになった。

図19 自分自身の意識の変容に関する指導者の振り返り(下線は筆者)

Ⅶ 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

- (1) 学校行事や児童の実態と関連付けて題材を設定したり、アンケート結果や他の教職員等の専門的知識を生かしたりしたことで、児童の問題意識を高めることができた。
- (2) 「目標ボード」を基に解決方法を交流したり、「やる気アップ交流会」で仲間と実践を振り返ったりするなどの、学級での話し合いを生かし、互いの考えを認め合う中で、児童が自分に合った具体的な解決方法を決め、決めたことについて粘り強く実践することができた。
- (3) 指導者が課題解決の過程に沿った一連の活動で、問題意識を高める工夫、「目標ボード」および「なりたい自分になりまシート」の活用、「やる気アップ交流会」の設定を行った。それにより、個々の意思決定とそれに基づく実践が充実し、「なりたい自分に向けてがんばる力」を育てることにつながった。

2 今後の課題

- (1) 学級活動(1)の内容は、集団で合意形成を図りながら解決方法を決め、集団で実践するのに対し、学級活動(2)および(3)の内容は、児童が個々で意思決定し実践する。指導者は学級活動のそれぞれの内容を理解したうえで、どの内容で学級や個人の問題の解決に向かうのかを適切に判断し、授業を計画する必要がある。
- (2) 特別活動に係る資質・能力を効果的に育成するためには、児童が小学校の学級活動で合意形成を図ったり、意思決定をしたりした経験を生かせるようにしながら、中学校の特別活動においても計画的、継続的に授業実践を行う必要がある。

文 献

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示)」、平成30年(2018年)
- 2) 文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別活動編」、平成30年(2018年)
- 文部科学省「第4期 教育振興基本計画(閣議決定)」、令和5年(2023年)
- 文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程センター「みんなで、よりよい学級・学校活動をつくる特別活動 小学校編」、平成31年(2019年)
- 文部科学省 国立教育政策研究所「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料 小学校特別活動」、令和2年(2020年)
- 滋賀県総合教育センター「『学ぶ意欲を引き出す学習集団』の形成を目指す小学校の特別活動」、令和6年(2024年)
- 滋賀県総合教育センター「もっとやってみたくなる!特別活動」、令和6年(2024年)
- 清水裕士「フリーの統計分析ソフトHAD:機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案」『メディア・情報・コミュニケーション研究』第1巻、平成28年(2016年)

付 録

付録① 「なりたい自分に向けてがんばる力」尺度の探索的因子分析結果(最尤法プロマックス回転 回答数122)

項目	因子 負荷量	共通性	平均値	標準偏差
4 目標達成に向けて取り組む中で、自分の目標が自分に合った具体的な目標 になっているかどうかを考え直していますか。	.82	.68	2.60	0.99
6 自分の目標達成に向けて取り組む中で、仲間とはげましやアドバイスの言 葉を送り合っていますか。	.61	.37	2.50	1.01
5 自分の目標達成に向けて取り組んだことを振り返り、できるようになった ことや、もっとがんばりたいことを考えていますか。	.57	.32	2.75	0.92
1 学級活動で自分の目標を立てるとき、自分だけで考えるのではなく、学級 の仲間と話し合いながら立てていますか。	.53	.28	2.36	1.11
7 学級の仲間は、自分の目標に向けてがんばっていると感じますか。	.52	.27	3.06	0.92
2 学級活動で自分の目標を立てるとき、自分に合った具体的な目標を立てて いますか。	.51	.26	2.96	0.89
8 学級の仲間が自分の目標に向けてがんばっている姿を見て、自分もがんば ろうと思いますか。	.42	.18	3.49	0.75
3 自分の目標を立てた後、目標達成に向けて決めたことを実際に取り組んで いますか。	.38	.14	3.17	0.79

$\alpha=0.77$ $\omega=0.78$

付録② 研究始期と終期の平均差検定の結果

	始期		終期		t	p	効果量
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			
なりたい自分に向けて がんばる力	2.86	0.58	3.45	0.38	10.71	<.001***	1.21

* $p<.05$ 、** $p<.01$ 、*** $p<.001$

トータルアドバイザー

帝京大学教育学部教授

安部 恭子

専 門 委 員

滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課主査

川端 清司

研 究 委 員

守山市立河西小学校教諭

横山 周平

米原市立坂田小学校教諭

谷口 光

彦根市立城西小学校教諭

大橋 裕也

竜王町立竜王小学校教諭

藤井 大輔